

秋期福音特別集会（1）（京都）

預言者たる「エホバの僕」

——イザヤ書第49章～52章——

1982年11月27日

小池辰雄

預言者 エホバ我を召し 汝はわが僕なり わが報いはわが神にあり 神さまのもとに帰る
異邦人の光とする イスラエルの聖者の故 神の根源語 一極絶対 第三のエホバの僕の歌
無者 無義の義 無即無限無量者 義が救い 無条件に受けとる 全存在で一如の境地 不識
エホバを知る 祈り

【イザヤ49】

「もろもろの島よ我にきけ、遠きところのもろもろの民よ耳をかたむけよ。
我うまれいづるよりエホバ我を召し、われ母の胎をいづるよりエホバわが名
をかたりつけたまえり。²エホバわが口を利剣となし我をその手のかげにか
くし、我をとぎすましたる矢となして簾^{えびら}におさめ給えり。³また我にいい給
わく、汝はわが僕なり、わが栄光のあらわるべきイスラエルなりと。⁴され
ど我いえり、われは徒然^{いたすら}にはたらき益なくむなしく力をついやしぬと。然^さは
あれど誠にわが審判^{さばき}はエホバにあり、わが報^{むくい}はわが神にあり。⁵ヤコブをふ
たたび己にかえらしめイスラエルを己のもとにあつまらせんとて、我をうま
れいでしより立てておのれの僕となし給えるエホバ言い給う（我はエホバの前
にとうとくせらる、又わが神はわが力となりたまえり）⁶その聖言にいわく、なん
じわが僕となりてヤコブのもろもろの支派^{わかれ}をおこし、イスラエルのうちのの
こりて全うせしものを帰らしむることはいと軽し。我また汝をたてて異邦人^{ちとくにびと}
の光となし、我がすくいを地のはてにまで到らしむ。⁷エホバ、イスラエルの
贖主^{あがないぬし}イスラエルの聖者は、人にあなどらるるもの民にしみきらわるるも
の長^{おさ}たち^{えき}に役せらるる者にむかいて如此^{かく}いいたもう。もろもろの王は見てた
ちもろもろの君はみて拝すべし。これ信実^{まこと}あるエホバ、イスラエルの聖者な
んじを選びたまえるが故なり。

⁸エホバ如此^{かく}いいたもう、われ恵みのときに汝にこたえ、救いの日になん
じを助けたり。われ汝をまもりて民の契約とし、国をおこし荒れすたれたる
地をまた産業としてかれらにつがしめん。⁹われ縛^いしめられたる者にいでよ
といい、暗^{くら}におるものに顕^あれよといわん。かれら途すがら食うことをなし、



もろもろの禿^{かぶろ}なる山にも牧草をうべし。¹⁰かれらは飢えずかわかず、又やけたる砂もあつき日もうつことなし。彼等をあわれむもの之をみちびきて泉のほとりに和^{やわら}かにみちびき給うべければなり。¹¹我わがもろもろの山を路とし、わが大路をたかくせん。¹²視よ人々あるいは遠きよりきたり、あるいは北また西よりきたらん。あるいはまたシニムの地よりきたるべし。¹³天ようたえ地よろこべ、もろもろの山よ声をはなちてうたえ、エホバはその民をなぐさめその苦しむものを憐れみたまえばなり。

¹⁴されどシオンはいえりエホバ我をすて主われをわすれたまえりと。¹⁵おんな^{ちのみこ}その乳兒をわすれて己がはらの子をあわれまざることあらんや。縦^{たと}いかれら忘るることありとも、我はなんじを忘るることなし。¹⁶われ^{たなごころ}掌になんじを彫刻^{ほりきざ}めり。なんじの石垣はつねにわが前にあり。¹⁷なんじの子輩^{こち}はいそぎ来り、なんじを毀^{こぼ}つもの汝をあらす者は汝より出でざらん。¹⁸なんじ目をあげて環視^{みまわ}せよ、これらのもの皆あいあつまりて汝がもとに来るべし。エホバ宣^{のたまわ}給く、われは活く、なんじ此等をみな身によそおいて飾りとなし、新婦^{にいづま}の帯のごとくに之をまとうべし。……²⁶我なんじを虐^{しえた}ぐるものにその肉をくらわせ、またその血をあたらしき酒のごとくにのませて酔わしめん。而して万民はわがエホバにして汝をすくう者、なんじを贖^{あらい}うもの、ヤコブの全能者なることを知るべし。

【イザヤ50】

¹エホバかくいい給う、わがなんじらの母をさりたる離書^{さりふみ}はいずこにありや。我いずれの債主^{さいしゅ}になんじらを売りわたししや。視よなんじらはその不義のために売られ、なんじらの母は汝らの咎^{とが}戻^{かへ}のために去られたり。²わがきたりし時なゆえ一人もおらざりしや。我よびしとき何故ひとりも答^{こた}うるものなかりしや。わが手みじかくして贖^{あらい}いえざるか。われ救うべき力なからんや。視よわれ叱咤^{しかた}すれば、海はかれ河はあれのとなり、そのなかの魚は水なきによりかわき、死にて臭氣をいだすなり。³われ黒きころもを天にきせ、鹿布^{あらたえ}をもて蔽^{おおい}となす。

⁴主エホバは教えをうけしものの舌をわれにあたえ、言をもて疲れたるものを扶^{たす}け支^{たす}うることを知り得しめたもう。また朝ごとに醒^さしわが耳をさまして教をうけし者のごとく聞くことを得しめたもう。⁵主エホバわが耳をひらき給えり。われは逆^{さか}うことをせず、退くことをせざりき。⁶われを撻^{むちう}つものにわが背をまかせ、わが鬚^{かみ}をぬくものにわが頬をまかせ、恥と唾^{つば}とをさくするために面^{かほ}をおおうことをせざりき。⁷主エホバわれを助けたまわん。この故にわれ恥ることなかるべし。我わが面^{かほ}を石の如くして恥しめらるることなき



を知る。⁸われを義とするもの近きにある。たれか我とあらそわんや。われら相共にたつべし。わが仇はたれぞや。近づききたれ。⁹主エホバわれを助け給わん。誰かわれを罪せんや。視よ、かれらはみな衣のごとくふるび、蠹^{しみ}のためにくいつくされん。¹⁰汝等のうちエホバの僕をおそれその僕の声きくものは誰ぞや。暗^{くら}をあゆみて光をえざるとも、エホバの名をたのみ、おのれの神にたよれ。¹¹火をおこし火把^{ひのたば}を帯^{おび}るものよ、汝等みなその火のほのなかをあゆめ、又なんじらの燃やしたる火把のなかをあゆめ。なんじら斯くのごとき事をわが手よりうけて悲しみのうちに臥すべし。

【イザヤ 51】

¹義をおい求めエホバを尋ねもとむるものよ、我にきけ。なんじらが斫^{きり}出されたる磐となんじらの掘出されたる穴とおもい見よ。²なんじらの父アブラハム及びなんじらを生みたるサウをおもい見よ。われ彼をその唯一人なりしときに召し、これを祝してその子孫をまし加えたり。³そはエホバ、シオンを慰めまたその凡てあれたる所をなぐさめて、その荒野をエデンのごとくその沙漠をエホバの園のごとくなしたまえり。斯てその中によるこびと^{たのしみ}とあり、感謝とうたう声とありてきこゆ。

⁴わが民よわが言にこころをとめよ。わが国人よわれに耳をかたづけよ。^{おきて}律法はわれより出づ。われわが途をかたく定めてもろもろの民の光となさん。⁵わが義はちかずきわが救いはすでに出たり。わが臂^{かひ}はもろもろの民をさばかん。もろもろの島はわれを俟望^{まちのぞ}み、わがかい^{よりのま}に依頼^{よりたのま}ん。⁶なんじら目をあげて天を觀^みまた下なる地をみよ、天は烟^{けむり}のごとくきえ地は衣のごとくふるび、その中にすむ者これとひとしく死なん。されどわが救いはとこしえにながらえ、わが義はくだくることなし。

⁷義をしろものよ、心のうちにわが律法をたもつ民よ、われにきけ。人のそしりをおそるるなかれ、人ののしりに憎^{おの}くなかれ。⁸そはかれら衣のごとく蠹^{しみ}にはまれ、羊の毛のごとく蟲^{むし}にはまれん。されどわが義はとこしえに存^{たも}たえ、わがすくい万代^{よろずよ}におよぶべし。

⁹さめよ醒めよ、エホバの臂^{かひ}よちからを着よ。さめて古えの時むかしの代にありし如くなれ。ラハブをきりころし鰐^{わに}をさしつらぬきたるは汝にあらずや。¹⁰海をかわかし大なる淵^{ふち}の水をかわかし、また海のふかきところを贖^{あが}われたる人のすぐべき路となししは汝にあらずや。¹¹エホバに贖^{あが}いすくわれしもの歌うたいつつ歸りてシオンにきたり、その首^{くうべ}にとこしえの歡喜^{よろこび}をいただきて快樂^{たのしみ}とよろこびをえん。而してかなしみと嘆息^{なげき}とはにげさるべし。

¹²我こそ我なんじらを慰むれ。汝いかなる者なれば死ぬべき人をおそれ、



草の如くなるべき人の子をおそるるか。¹³いかなれば天をのべ地の基をすえ
汝をつくりたまえるエホバを忘れしや。何なれば汝をほろぼさんとて予備す
る虐ぐるものの憤れるをみて常にひねもす懼るるか。虐ぐるものの忿^{いぎど}悲^いはい
ずこにありや。¹⁴身をかがめいる俘囚^{とらわれびと}はすみやかに解かれて、死ぬることな
く穴にくだることなく、その食^{かて}はつくること無るべし。¹⁵我は海をふるわせ
波をなりどよめかする汝の神エホバなり。その御名を万軍のエホバという。
¹⁶我わが言をなんじの口におき、わが手のかげにて汝をおおえり。かくてわ
れ天をうえ地の基をすえ、シオンにむかいて汝はわが民なりといわん。……

【イザヤ52】

¹シオンよ醒めよさめよ、汝の力を衣^きよ。聖都^{きよみやて}エルサレムよなんじの美し
き衣をつけよ。今より割礼をうけざる者および潔からざるものふたたび汝に
いること無^{なか}るべければなり。²なんじ身の塵をふりおとせ。エルサレムよ起
きよすわれ。俘^{とらわ}れたるシオンのむすめよ汝がうなじの縄をときすてよ。

³そはエホバかく言い給う、なんじらは価なくして売られたり。金なくし
て贖^{あが}わるべし。⁴主エホバ如此い給う、さきにわが民エジプトにくだりゆ
きて彼処にとどまれり。アッスリヤ人ゆえなくして彼等をしえたげたり。
⁵エホバ宣^{のたま}給く、わが民はゆえなくして俘^{とらわ}れたり。されば我ここに何をなさん。
エホバのたまわく、彼等をつかさどる者さけびよばわり、わが名はつねに
終日^{ひねもす}けがさるるなり。⁶この故にわが民はわが名をしらん。このゆえにその
日には彼らこの言をかたるものの我なるをしらん。我ここに在り。

⁷よろこびの音信^{おとずれ}をつたえ平和をつげ、善きおとずれをつたえ救いをつげ、
シオンに向かいてなんじの神はすべ治めたもうというものの足は山上にあり
ていかに美しきかな。⁸なんじが斥候^{ものみ}の声きこゆ、かれらはエホバのシオン
に帰り給うを目と目とあいあわせて視るが故にみな声をあげてもろともによ
たえり。⁹エルサレムの荒廃^{あれた}れたるところよ声をはなちて共にうたうべし。
エホバその民をなぐさめエルサレムを贖^{あが}いたまいたればなり。¹⁰エホバその
きよき手をもろもろの国人の目のまえにあらわしたまえり。地のもろもろの
極^{はて}までもわれらの神のすくいを見ん。

¹¹なんじら去れよされよ、彼処をいでて汚れたるものに触^ふるなかれ。その
中をいでよ。エホバの器をになう者よなんじら潔くあれ。¹²なんじら急ぎい
づるにあらず、趨^{はし}りゆくにあらず。エホバはなんじらの前にゆきイスラエル
の神はなんじらの軍後^{しんがり}となり給うべければなり。……



●預言者

第二イザヤは「エホバの僕」が中心です。ヘブライ語では

「エベッド・ヤーヴェー」

という。私は「ヤーヴェー」とは言わないで、「エホバ」と言っている。

「エホバ」

という読み方は、

「わが主」(アドナイ)

という言葉と

「実存者」(ヤーヴェー)

という言葉の母音と子音の混合した読み方なのですが、それは間違っただけでも、その間違いが怪我の功名でかえって面白いから、

「実存主」

という意味で「エホバ」という言い方を私は使っているわけです。

ヘブライ人は旧約聖書の預言書を「預言者」(ナーバー、「複」ネビーム)と言っているが、この言葉は沸騰するような意味をもった言葉です。神さまの聖言をいただいて、沸騰してものを言うような、煮えたぎるような人が預言者なんです。これは、神の言が入ってきて、神の言は力を、生命をもっていますから、これを受けると、黙っていられなくなる。それが預言者なんです。アモスの、

「獅子吼^ほゆ、誰か懼^{おそ}れざらんや。主エホバ言語^{ものい}たもう、誰か預言せざらんや。」

(アモス3:8)

という言葉が預言者の本質をあらわしている。ですから、預言者は神の口である。即ち、神の口となって神の言を実現する者です。

今日の主題は「預言者たるエホバの僕」という。エホバとは、

「実存者にしてわが主なるもの」

ということです。「僕」とは、実存主なるエホバの僕ですから、神の手足となって神さまの言うとおりに行動する者です。だから、「僕」は行為面で、「預言者」は言葉の面をいつているわけです。言と行ということ。神さまの言を聞いて、それが形に行動にあらわれる。ですから、

「預言者たるエホバの僕」

というのは、実はエホバの僕と預言者とは離すことができない。どの預言者も、本当の預言者ならば、エホバの僕なんです。ただ言葉を伝えて話しているばかりでなくて、彼らは本当に全存在をもつて言いまた動いている。これは言行一如の世界です。何がそうさせるかという、神の霊が、神霊がさせる。口に発しては言葉となり、手足に発しては行為となる。普通、預言者というと、ただ口ばかりかと思うけれども、そうではない。みな彼ら



は存在的に、実存的に、全的にものを言い、全的に行動する。分離はできない。それは預言者でありまた僕であるということです。

「エホバの僕の歌」とはイザヤ書42章1～4節、49章1～7節、50章4～9節と53章の4箇所です。

●エホバ我を召し

イザヤ書49章に入ります。

「もろもろの島よ我にきけ、遠きところのもろもろの民よ耳をかたむけよ。

これは詩ですから、対句でくる。「島よ」「民よ」と言い換えているが、内容は同じことです。

我うまれいづるよりエホバ我を召し、われ母の胎をいづるよりエホバわが名

をかたりつけたまえり。

エレミヤなんかは、

「生まれないさきから預言者にされた」

とあります。

「われ汝を腹につくらざりし先に汝をしり、汝が胎をいでざりし先に汝を聖め、

汝をたてて万国の預言者となせりと。」(エレミヤ1:5)

第二イザヤは、

「うまれいづるよりエホバ我を召し」

とある。もちろん、生まれぬ先から神さまはもう決めていらつしやったと思いますけれども。

私たちもこの福音を受けとったら、みな一人ひとは本質的には預言者的なものがあるわけです。

「とうていキリスト教なんていうものは別の世界のことくらいに思っていたのが、

キリストに捕まってしまつて、もう他には行きどころがない」

ということを思うと、これは自分の思わざる先に既に神さまの方で決めておられた。それは即ち——「予定説」なんていうことを言わなくなつていいけれども——予定されていた。

「あの人は予定されているかいらないか」

なんて、そんなことを客観的に言うことは間違いです。それは自分の体験として「予定されていた」という告白による。そう告白せざるを得なくなつてしまつた。こういうのを読むときに、

「なるほど自分も、こんなやつだけれども、そういうように神さまに召されていたのか。ありがたいな」

と、皆さんお一人ひとりが思わなくてはならないわけです。こういう第二イザヤのエホバの僕の歌をうたっている人は、名前は分からない。

² エホバわが口を利剣^{とさ}となし我をその手のかげにかくし、我をときぎしました



る矢となして箴^{えびら}におさめ給えり。

「剣」とか「矢」とか非常に物騒な表現をしていますが、その内容は神の特に審判的な言を伝える者ということです。ヘブル書に、

「神の言は生命^{いのち}あり、能力^{ちから}あり、両刃^{もろは}の剣^{つるぎ}よりも利^とくして、精神と靈魂^{おもいこころざし}、関節^{ため}と骨髓^とを透^{とお}して之^{わか}を割^わち、心の念^{おもい}と志望^{こころざし}とを験^{ため}すなり。」(ヘブル 4・12)

とある。「神の言は生命あり、能力あり」という。本当にそうです。意味ではない。キリストが、

「わが言は靈なり生命なり」

と言われたように。

● 汝はわが僕なり

3 また我にいい給わく、汝はわが僕なり、わが栄光のあらわるべきイスラエルなりと。

非常に力強い言葉です。僕は神さまの言を體現しますから、存在でもって現しますから。その神の言が體現された事態が即ち「神の栄光が現れる」ということです。そこに神の栄光が現れる。

キリスト者は福音の証者でなければ、キリスト者ではない。プロテスタントの信仰が非常に觀念化してしまった。新宗教改革は我々が、また私たちの知らない、それに目覚めた人たちがもうやるべきときが来ている。とにかく、実証しなければダメなんです。自分で力んで実証するのではない。ざるを得ない角度になって、グーッと體現されていく。

「お前は私の僕だ」

と。聖書は私たちに語りかけている。

「そうか、無名の預言者がそう言われたか」

ではない。我々一人ひとりが、聖書を読むとなったら、一人称・二人称で真剣勝負で読まなければダメです。

「お前は私の僕だ」

と言われたら、もう全存在が平伏さなければダメです。僕というのは神の前に平伏さなければ僕ではないんだから。平伏して、

「参りました!」

と言うと、

「お前はわが栄光の現れるべきイスラエルである」

と言われる。これを新約で読めば、

「お前はこの活ける福音の現れるべき証者である」

ということになる。これは何もイスラエルではないが、無名の預言者はイスラエルでもある。



ところが、無名の預言者一人、第二イザヤに向かつて

「お前はイスラエルだ」

と言っている。一、即、全の世界です。全、一、と言ってもいい。これは全体主義を言っているのではない。間違えてはこまる。

S 君に

「お前は召団である」

というのと同じことです。それを

「私は召団の一員です」

とは言えない。その一員において全というものの重みがかかってしまっている。あなた方一人ひとりが常に全召団を背負っていなければダメです。そういう一人ひとりなら、もうこれだけの人数がいたら、えらいことです。

「人の生くるはパンによるにあらず、エホバの言による」

という。普通は、我々の魂は肉体の中に宿っていると思う。ところが、

「肉体が魂の中に宿っているのだ」

と言った人がある。新プラトン主義のプロティノスという人です。プロティノスとか、ドイツの中世のエックハルトは本当に凄い。その中にももの凄いものがあることが見損なわれている。それを純粋に福音とは言いませんけれども。3 節の、

「汝はわが僕なり、わが栄光のあらわるべきイスラエルなり」

とは愉快な言葉だ。学者というのはすぐ、

「エホバの僕はこの場合複数ではないか。イスラエルというのはまさか全イスラエルではなからうが、そのイスラエルの中のある部分の人たちであろう」

なんてことをゴタゴタ議論する。学者というのは気合が分からない。神さまの言葉の気合が読めなければダメなんです。大体、イスラエルという言葉はもともと単数だった。ヤコブがイスラエルと言われたんだから。

「それを歴史的に思い出して言っている」

なんてことではない。

●わが報いはわが神にあり

4 されど我いえり、われは徒然^{いたずら}にはたらし益なくむなしく力をついやしぬ（使

い果たしぬ）と。

本当に正直ですね、

「そう仰るけれども、今までさんざん無駄をしましたよ」

と。私もそうだな。78 歳になるけれども、どのくらいマイナスの時を費やしたかわからない。申し訳ない。だから、仕方がないから、少し先へ延ばしていただかないと。



「もう使い果たしぬ」

と、くたびれてしまったという。

然^さはあれど誠^{まこと}にわが審判^{さばき}はエホバにあり、わが報^{むくい}はわが神にあり。

「審判」(ミシユパート)という字は「道」とも訳せる。イザヤ書42章のエホバの僕の第一の歌に、「道」という字がたくさんでている。これが「審判」という字です。

「正しいところはこつちだぞ、間違っているところはあつちだぞ」

と言つてちゃんと区別してくれる、それが審判なんです。正邪善悪を区別する。だから、それによつてはつきりと正しいことが分かつてしまう。そこを歩けば、それが正道なんです。

「けれども、私の道は、審判は、正邪善悪は神さまにある。わが報いはわが神にあり」

と。審判に、その道に従つていけば、いくら人にどう言われようと、人の審判なんかはどうでもいい。必ず善き結果が出てくる。「報い」というのは善き結果ということ。その必然現れているところの結果が報いです。報いがあるから、やったのではダメです。道を踏んでいれば、それが自然に出てくる。

「善き樹は善き果を結び、善き根は善き花を咲かせる」

というわけだ。

●神さまのもとに帰る

⁵ヤコブをふたたび己にかえらしめ

とは、イスラエルを捕囚から帰還させたことです。

イスラエルを己のもとにあつまらせんとて、我をうまれいでしより立てておのれの僕となし給えるエホバ言い給う(我はエホバの前にとくとくせらる、又わが神はわが力となりたまえり)

エホバの言を直接に伝えているかと思つたら、今度は

「エホバはこう仰っている」

と言う。預言者の預言の書というのはいろいろなドラマティックな構造になっている。

「帰る」という。エルサレムに帰ることは、ただ場所ばかりではなくて、

「神さまのもとに帰る」

ということと、二つ意味が重なっている。エルサレムに帰っていくとは、異邦の神々の所に居るのではないということ。帰り行くことが本当の前進です。正に転進です。転じて進んでいく。帰るとは、向きを翻して進んでいく。だから、

「お前は預言者だから、その先きぶれをしる」

という。

(我はエホバの前にとくとくせらる、又わが神はわが力となりたまえり)

正にその通りです。神さまが力でなかつたら、どうにもならん。僕は神の生命と神の力で



動いているんだから。福音は、旧約から新約にいたるまで、神の御霊の力です。キリスト教界にこの神の、キリストの聖霊の力が本当にうすくなってしまった。

⁶その聖言にいわく、なんじわが僕となりてヤコブのもろもろの^{わかれ}支派をおこし、イスラエルのうちののこりて全うせしものを帰らしむることはいと軽し。

遺れる民を再び祖国に帰らしめるように導く使命をもっている。だから、この第二イザヤは一緒に帰っているわけです。使命的存在ですから。

●異邦人の光とする

しかも、

我また汝をたてて^{ことごとくにびと}異邦人の光となし、我がすくいを地のはてにまで到らしむ
(地のはてまでも我が救いとならしめん)。

これは素晴らしい言葉が出てきた。「異邦人の光とする」という。キリスト・イエスは、地上においては異邦人の光にはならなかった。もっぱらイスラエルの光であった。

「私は他の者には遣わされていない。イスラエルのために遣わされている」と、カナン⁶の女に仰った。

「それでも、子犬は机から落ちるパン屑をいただきます」

と、あのカナン⁶の女にキリストは一回だけやつつけられた。キリストはそういう魂の在り方を見て、「お前は本ものだ」と、すぐ誉めてくださる。

ところが、イエスは天界に行つてしまつてから、今度は、「異邦人の光」を選んだ。それがパウロです。だから、第二イザヤの預言は、はるか後のパウロにかかつてくるわけです。パウロは純粋にヘブル人だから。あれくらい鮮やかな転向をした者は、神・キリストの中に帰入した者はパウロの他にいない。パリサイ人の権化が正反対な世界にひっくり返された。それをイスラエル人はいつまでたつてもやらない。キリストは嘆かれた。

日本にはまだたくさん、キリスト教にこない人がいるから、あなた方一人ひとりが隣人の光になってください。第二イザヤは非常な使命をおびて神さまの言を伝えました。こういう第二イザヤの言あたりがキリストにはもうグーッときてたわけです。

●イスラエルの聖者の故

⁷エホバ、イスラエルの贖主イスラエルの聖者は、人にあなどらるるもの民にいみきらわるるもの^{おひ}長たち^{えき}に役せらるる者にむかいて^{かく}如此^{かく}いいたもう。もろもろの王は見てたちもろもろの君はみて拝すべし。

逆になつてしまう。このエホバの僕はどうも普通の人にはダメなんだ。エホバの僕として人に侮られる。キリストは、



「預言者は故里にいれられず」

なんて言つて、ナザレから出てしまった。親しいような人たち、身近な人たちほどこれが分らない。

「敵はむしろその家のものだ」

とキリストは言われた。あれは自分の体験から言われたんです。

「我よりも父母を、また何々を愛する者は我にふさわしからず」

と、キリストはひどいことを言う。

「それは親子であろうと、夫婦であろうと、恋人であろうと、ダメだぞ。左顧右眄

してはならない。私とお前の関係は一直線で、他のものを許さない」

と。そうすると、棄てたと思つたものは、逆にみなこれを救つてしまう。その構造が分からないものだから、キリストの言に躓くんです。キリストは説明なさらないから困つたものだ。

「聞く耳あるものは聞くべし」

なんて、ちよつと禅宗みたいところがある。

キリストがそうだったんだから。キリストは神さまの他は、マリヤであろうとヨセフであらうと問題ではない。12歳の少年キリストが父母に、

「私は本当のお父さんの家にいるのに、何だつて捜しに来たんですか」

なんて言つた、とんでもない少年だった。けれども、それでは親不孝かというところはない。十字架上でヨハネに、

「マリヤを頼んだぞ」

と仰つた。

そういうように、本当に縦の関係が通ると、横にグーッと全部、本当の愛で救いあげてしまう。忌み嫌われたつていいよ、逆に敵をも愛する。誇る者も愛してやる。躓いた者も黙つて担つてやる。

だから、逆に

「王は見てたち、もろもろの君はみて拝すべし」

とある。けなされた者を拝まざるを得なくなつてしまうと、不思議な預言をしている。

これ信実まことあるエホバ、イスラエルの聖者まことなんじを選びたまえるが故なり。

「イスラエルの聖者の故なり」

とある。これは何故かというところ、イスラエルの聖者エホバの栄光がそこに出ているからだという。こちらはボロ器、破れ器です。ボロ器、破れ器に神の光が宿っているわけです。だから、相手が参つてしまう。

これが第二のエホバの僕の歌で、非常に内容の深い力強いものです。



● 神の根源語

8 エホバ如此いいたもう、われ恵みのときに汝にこたえ救いの日になんじを助けたり。

これはパウロがコリント後書 6 章で同じ言葉を言っている。おそらくここから使ったのでしよう。詩篇 69 篇 13 節にも出てます。捕囚から解放されたその恵みの時、救いの日、そのためにお前を助けると。「助けたり」というのは預言的完了で、

「今助けつつあるんだ」

ということです。むしろ現在なんだ。はつきりしたことを言うときに完了形で言うわけです。ヘブライ語の動詞の形は完了と未完了しかない。現在完了、未来完了、過去完了と未完了。けれども、それは時ばかりでない。だから、旧約というのはむずかしい。学者によって訳し方はいろいろです。「こうである」と誰も断定できない。ヘブライ語は断定しないのがむしろいい。弾力性があるところがいい。その時その時でどっちにも読めるという。

大体、言葉で決め込んでしまうようなものは大したものではない。言葉は、乱暴に言うところの暗号です。その言葉が一体どういう現実から発しているかということを見破らなければいけません。そこが神の根源語なんです。ヘブライ語でもギリシヤ語でもない。神の根源語を日本語を通して、日本語の言葉の背後に読んでください。根源語の響きを読む。これは聖霊がくると読めるようになる。その根源語はもの凄い弾力性と生命をもっている。その生命を受けとらなかつたらダメです。

われ汝をまもりて民の契約とし、国をおこし、荒れすたれたる地をまた産業としてかれらにつがしめん（嗣業をつがしめん）。

神の嗣業^{しぎよう}、神のゆずりである。神の契約です。

9 われ縛^いしめられたる者にいでよといい、暗^{くら}におるものに顕^{あら}れよといわん。
「いでよ、顕れよ」とは出バビロニアのことです。

かれら途すがら食うことをなし、もろもろの禿^{かぶ}なる山にも牧草をうべし。
非常に豊かな道すじで、荒れてない。本当に恵みの道だというわけです。

10 かれらは飢えずかわかず、又やけたる砂もあつき日もうつことなし。
「日や月がうつ」というような言葉は詩篇 121 篇にあります、日照りでやられたりするようないことがないということです。

彼等をあわれむもの

即ちエホバは、

之をみちびきて泉のほとりに和^{やわ}かにみちびき給うべければなり。

これは非常に慰め深い言葉です。第二イザヤの中には非常に慰め深い言葉が出てきます。始めから、

「慰めよ、慰めよ」



でしよ、解放されるからね。非常に嬉しい帰還です。歓びの帰還、希望満々たる帰還です。

¹¹我わがもろもろの山を路とし、わが大路をたくせん。¹²視よ人々あるいは遠きよりきたり、あるいは北また西よりきたらん。あるいはまたシニムの地よりきたるべし。¹³天ようたえ地よろこべ、もろもろの山よ声をはなちてうたえ、エホバはその民をなぐさめその苦しむものを憐れみたまえばなり。

預言者は、「天よ、地よ」と、よく言う。また、動物や植物にむかつて呼びかける。全部、生命の連関の中にある。「被造物」という言葉があるが、これは物ではなくて、みな活けるもの。造られたる活けるものです。

「石まで叫ぶ」

なんて言っているんだから。

¹⁴されどシオンはいえりエホバ我をすて主われをわすれたまえりと。

「もう何十年もたつたから忘れられてしまつて、どうにもならん」

なんて思っている。捕囚時代に五十年もたつてゐるから。

「何年たとうが、絶対に棄てたのではないぞ、忘れたのではないぞ」

ということですよ。

¹⁵婦^{おんな}その乳兒^{ちのみこ}をわすれて己がはらの子をあわれまざることあらんや

そういうことがあるか、そんなものは母親ではないと。しかし、今の世の中にはだいたい間違つた現象があります。袋に入れて棄ててみたり。もうそうなつたら、母親でも女性でもない。

縦^{たと}いかれら忘るることありとも我はなんじを忘るることなし。

あなた方一人ひとりとはキリストに忘れられない。キリストは絶対に忘れない。

●一極絶対

こういう言葉を本当に身につけたら、

「ああ、いいよ。どう思われても、何を忘れられても、どう誤解されても結構です」

と、逆に力がある。運命環境がおかしくなればなるほど、逆に力がこなければ本ものではない。そうでないと、それは御利益信仰になる。

「禍害^{わざわい}も幸福^{しあわせ}もどちらも神さまはつくる」

と、イザヤ書の中にもヨブ記の中にもある。災いがこようが、幸いがこようが、どちらにせよ、本当の幸いはこちらにある。恵みの世界だから、どちらでも結構だと。それはいいよいよ神さまの中に自分を入れるための、この恵みの主体に入るためのことである。幸いでいい気になったつて、災いで失望したつてダメだ。失望もいい気もダメ、問題は神さまの恵み、祝福の方だということです。これが絶対の生き方です。幸不幸は相対の世界です。この世の判断はみな相対的判断でいつている。



私たちは絶対の世界に生きている。相対を絶した世界です。これは一極絶対の世界なんです。エホバの僕というのは一極絶対で生きている人です。自分の方には何もない。主という天極、一極が絶対なんです。自分は無極なんです。極が無い。私が言っている無なんというのは、神学者たちにはちよつと分からんね、特にヨーロッパの神学者には分からん。

16 われ^{たなごころ} 掌^{ほりきぎ} になんじを彫刻^{ほりきぎ}めり。なんじの石垣はつねにわが前にあり。

掌に入れ墨みたいなことを言っている。こういう表現で霊なる神のことを言っているから、ユダヤ人というのは非常に具体的で、観念でない。しかもそれで決して偶像にはしてない。そこは凄い。掌に霊の文字で刻んであるんだという。仏教の世界はかなり哲学的だから、そういう表現をされると、

「何だか、神話的だな」

と思ってしまう。しかし、神話的な表現でいかなる凄い現実が言われているかということを読めなくてはいけない。

26 我なんじを虐^{しえた}ぐるものにその肉をくらわせ、またその血をあたらしき酒のごとくにのませて酔^よわしめん。

随分ひどいことが書いてある。「その肉」というのは、虐げる彼等は自分の肉を食らうということ。

而して万民はわがエホバにして汝をすくう者、なんじを贖うもの、ヤコブの全能者なることを知るべし。

大事なのはこのことです。「贖う」というのはもともと買い取ってくることです。けれども、それはお金のことではない。この場合の贖うという言葉は霊的な意味です。

●第三のエホバの僕の歌

イザヤ書50章に入ります。

1 エホバかくいい給う、わがなんじらの母をさりたる離書^{さりぶみ}はいずこにありや。我いずれの債主^{さいしゅ}になんじらを売りわたししや。視よなんじらはその不義のために売られ、なんじらの母は汝らの咎^{とが}戻^{かへ}るために去られたり。

イスラエルはちよつと間違っているんだが、それは汝らの母は汝らの咎のために去られたので、離書^{さりぶみ}をつかわせられた。

2 わがきたりし時にゆえ一人もおらざりしや。我よびしとき何故ひとりも答うるものなかりしや。わが手みじかくして贖いえざるか。

神さまは、

「お前たちがそういった不如意な事態になっているのはお前たちの咎のためなんだけれども、しかし、そうだからといって、決して私はお前たちを棄てたのではない。諦めるな、捨てばちになるな。呼んでいる時に、もうどんな状態でもよいから、



はいと答えろ」

と、そういうことです。しかし、一人も応じない、一人もいない。この句は非常にひびく句です。

われ救うべき力ならんや。視よわれ叱咤すれば、海はかれ河はあれのとなり、

そのなかの魚は水なきによりかわき、死にて臭気をいだすなり。³われ黒き

ころもを天にきせ、^{あらたえ}鹿布をもて蔽^{おおい}となす。

モーセを通して出エジプトのときにエジプトでいろいろな奇蹟が起きたでしょ。一点俄^{にわか}にかき曇つて三日間まっ暗になってしまったとか、死臭が漂ったとかいろいろなことがあった。

今度は4節から、第三のエホバの僕の歌です。

⁴主エホバは教えをうけしもの^{たす}の舌をわれにあたえ、言をもて疲れたるものを扶け支^{たす}うることを知り得しめたもう。

「舌」と「言」は結局同じことです。異言のときは、よく舌という言葉を使う。「教えをうけしもの」とは教えられた者だから門弟のことになる。

また朝ごとに醒^{さます}しわが耳をさまして教えをうけし者のごとく聞くことを得しめたもう。

「ごとく」ではなく「らしく」です。

⁵主エホバわが耳をひらき給えり。われは逆うことをせず、退くことをせざりき。

心の耳をひらいて、それに逆らうことをせず退くことをしなかったと。

⁶われを撻^{むちう}つものにわが背をまかせ、わが鬚^{ひげ}をぬくものにわが頬をまかせ、恥と唾とをさくるために面^{かお}をおおうことをせざりき。

キリストの姿が既にここに出ています。無抵抗、無手勝流。これは神さまの力が入って来すから、どのようにされても普通に感ずるような感じかたはしなくなる。

⁷主エホバわれを助けたまわん。この故にわれ恥ることなかるべし。我わが面^{かお}を石の如くして恥しめらるることなきを知る。

わが顔を火打石のようにしたと。打った方が痛いくらいだ。

⁸われを義とするもの近きにあり。たれか我とあらそわんや。

もう絶対にこつちが勝利だと。「われを義とする」というのだから、その人はパリサイ的に自分を義としているのではない。神さまが「私を義とする」というのは、「私は認められた」ということではない。「義認」という言葉はいかん。「義と認める」ではなく、「義とする、義を与える」です。



●無者

なぜ義とされるか、なぜ義としたもうか、なぜ義を与えられるか。こちらが無極だからです。無だから。

「無者」

だからです。自分を何ものもしないで神さまを一切としているのが僕でしょうが。僕は即ち無者でしょうが。自分なんかすつとんでいる我なんです。全然問題にならない、すつとんでいる我です。これは楽で力がくる。

若い人は何か自分があるとと思っているかも知れないけれども。まあいいよ、いきなり一飛びに私の境地にならなくなつて。少しやってごらん、くたびれるから。大いに頑張ってもいいよ。私は頑張らないんだ。頑張りは上からくる。いわゆる霊的なんて言う必要はない。

「まだ私は霊的でないものですから」

なんて言ったらダメだよ「霊的」でなくて結構です。「的」ではダメです、霊は上からくるんだから。聖霊は上からくる。

私の友人に一年以上も大事な薬を飲んだり注射されても少しも手の痺れが治らない人がいた。

「そうか、ちょっと貸してごらん」

と、私は三十秒くらい手をその人に按いて祈った。

「はいっ」

と言ったら、治ってしまった。それから何日たつても何ともなくなってしまった。本当に治ってしまった。

それはキリストの力がくるから。こちらが無者になればくるんだ。私はその時には——身体は何も平伏してはいませんよ——けれども、魂は平伏しています。

「エン・クリスト」(キリストの中に)

だから。「エン・クリスト」がお題目ではダメです、現実でなければ。皆さんは誰でもそれができる。無条件の世界だから。

「どうでなければならぬ」

ではない。

「何ものでもない」

という無条件の世界です。

●無義の義

この無条件は十字架が与えてくださっている。キリストは、

「条件付きの好きなお前の自我という、我執というやつは全部私が引き受けたから。相対的人間小池は死に至るまでガタガタであろうと何だっていい。その奥は絶対



無の世界だ。相対的人間小池を見ていろいろなことを言う者は言わせておけ。お前には大事な使命があるぞ」

と言つてくださる。「はいっ」と応える、それだけの話です。それが無の消息です。これは何とも説明できない。説明したつてしようがない。皆さんがご自分で体験させられて、「そうだつ」

と共感してくれなくては。

「我を義とする」とあるが、なぜ義とされたかということ、全部自分を明け渡しているからです。

「それが本当の義だ。義しいの義しくないのという相対的な善悪、義不義の問題ではないぞ」

と仰るんです。だから、義という現実が非常な恵みになる。義が恐いうちはダメです、恵みなんです。キリストの義をたまわる。無義の義という。義の無い義なんです。そういう境地がわかるかい。それをなにも「宗教的」なんて言わなくなつていい。

「われを義とするもの近きにあり」

とは楽しい言葉ですよ。

「私はまだとてもダメだから、この言葉はとても受けとれません」

なんて、自分が何か義になろうとしたつて、それはダメです。それは無理だ。無義でいいんだ。

「義なんかありません」

と言うと、

「汝を義とする」

と向こうから言つてくる。「われを義とする」とは、「自分の義を認めてくれたか」ではない。

「自分の無義をよろこんで義となした」

ということですよ。

●無即無限無量者

キリストは何もできない、何も言えない、何も教えない。キリストこそ本当に無者なんだ。そうしたら、無限無量になる。だから、イエス・キリストは

「無即無限無量者」

です。イエスが無なんです。キリストが無無限無量なんです。そして、これは離すことができない。だから、イエス・キリストという言葉がいかに不可離の言葉であるかが私ははっきり分かった。そんなことは誰も言わん。無即無限無量ということです。イエスがキリストであり、キリストがイエスであることは離すことができない。本当に無の現実となつたら、キリストは無無限無量です。



「我を見し者は父を見しなり」

と仰った。ペテロもパウロも、

「我を視よ」

と言いました。ペテロもパウロも罪びとにすぎません。パウロは、

「我は罪びとの首なり」^{かしら}

と言いました。けれども、「我を視よ」となぜ言えるか。キリストがそこに本当に生きているからです。相対的宗教的実存が立派になったからではない。立派なんてものは問題でない。8 節の、

「われを義とするもの近きにある」

は大事な言葉です。旧約では「近きにある」だが、新約になると、

「われを義とするもの内にあり」

だ。「わがうちにありたもう」ということになる。

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

という世界です。

われら相共にたつべし。わが仇はたれぞや。近づききたれ。⁹ 主エホバわれを助け給わん。

「助け給う」で結構です。

誰かわれを罪せんや。

これはパウロのローマ書 8 章と同じだ。

視よ、かれらはみな衣のごとくふるび、^{しみ}蠹^しのためにくいつくされん。¹⁰ 汝等のうちエホバの僕をおそれその僕の声をきくものは誰ぞや。

「エホバの僕をおそれ」ることと「その僕の声をきく」とは同じことです。僕を通してエホバの言が来ますから。

暗^{くら}をあゆみて光をえざるとも、エホバの名^{みな}をたのみ、おのれの神にたよれ。

どんな暗い所でも神さまの御名は光るぞ、御名が明かりだという。ミカ書にも同じような所がある。

「我が敵^{あだ}人よ我につきて喜ぶなかれ、我仆^{おき}るれば興^{おき}あがる。幽暗^{くら}に居ればエホバ我の光となりたもう。」(ミカ 7・8)

暗い所においてもエホバは私の光で、月も太陽も照らす必要はないんだと。親鸞も身边に仏の光を発していたという。

火をおこし^{ひのたば}火把^{おふ}を帯^おるものよ、汝等みなその火のほのなかをあゆめ、又なんじらの燃やしたる火把のなかをあゆめ。なんじら斯くのごとき事をわが手よりうけて悲しみのうちに臥すべし。

これは一種の火渡り式のことです。密教的な言葉です。



●義が救

イザヤ書51章に入ります。

「義をおい求めエホバを尋ねもとむるものよ、我にきけ。

51章では「義」のことが非常にでている。

なんじらが^{きりいだ}斫出されたる磐となんじらの掘出されたる穴とおもひ見よ。

これはちよつと学者が頭をひねつてしまふ、そういうことがあつたかなんて。これは七十人訳によると「切り出した、掘り出した」となっていて、受け身ではない。そういうことはやつたからと。ギリシヤ語訳の聖書のほうがこの場合は正しいようです。

²なんじらの父アブラハム及びなんじらを生みたるサラをおもひ見よ。われ彼をその唯一人なりしときに召し、これを祝してその子孫をまし加えたり。

このことはイザヤ書の方々にたくさんでています。「唯だ一人を召した」ということです。皆さんはそれぞれの環境において唯だ一人の人ですよ。

³そはエホバ、シオンを慰めまたその凡てあれたる所をなぐさめて、その荒野をエデンのごとくその沙漠をエホバの園のごとくなしたまへり。斯てその中によろこびと^{たのしみ}歡樂とあり、感謝とうたうたう声とありてきこゆ。

イスラエルを希望をもつて慰めているわけです、「だから、心配するな」と。アブラハムの時の祝福を顧みて、これからいよいよ祝福を与えられるぞという言葉です。

⁴わが民よわが言にこころをとめよ。わが国人よわれに耳をかたぶけよ。律法はわれより出づ。われわが途をかたく定めてもろもろの民の光となさん。
⁵わが義はちかずきわが救いはすでに出たり。わが^{かいな}臂はもろもろの民をさばかん。もろもろの島はわれを^{まちのぞ}俟望み、わがかいなに^{よりのま}依頼ん。
⁶なんじら目をあげて天を觀また下なる地をみよ、天は^{けむり}烟のごとくきえ地は衣のごとくふるび、その中にすむ者これとひとしく死なん。されどわが救いはとこしえにながらえ、わが義はくだくることなし。

「義」と「救い」という言葉が対句になつてしよつちゅう出てくる。第二イザヤではこれが特色なんです。義が救いです。与えられる義なんです。義と救うんです。義を与える。これが救いなんです。

「自分の名のためにお前の罪をゆるす」と言っている。神さま中心なんだ。

⁷義をしろものよ、心のうちにわが律法をたもつ民よ、この場合の「義」は「律法」と同義語で、律法というものを非常に義として大きくつかまえて言っているわけです。「律法は聖なるもの」という。

われにきけ。人のそしりをおそるるなかれ、人ののしりに^{おの}憎くなかれ。
⁸そはかれら衣のごとく^{しみ}蠹にはまれ、羊の毛のごとく^{むし}蟲にはまれん。されど



わが義はとこしえに存^{なが}らえ、わがすくい万代^{よろずよ}におよぶべし。

義と救いがまた繰り返し出てくる。そのようにしてイスラエルには救いがある。しかし、この義と救いの内容は何かということはまだ出てこない。

●無条件に受けとる

9 さめよ醒めよ、エホバの臂^{かいな}よちからを着よ。

と、非常に神さまにむかって呼びかけているわけだ。預言者がこう言っているのだからおもしろい。

さめて古^{いにし}えの時むかしの代にありし如くなれ。ラハブをきりころし鰐^{わに}をさしつらぬきたるは汝にあらずや。

「ラハブ」というのは「エジプト」の代名詞みたいなものです。

10 海をかわかし大いなる淵^{ふち}の水をかわかし、また海のふかきところを贖われたる人のすぐべき路となししは汝にあらずや。

これは紅海を渡ったときのこと。

「あの出エジプトのことをやったのはあなたではないですか。昔のようにやってくださいよ」

と言っているわけです。

11 エホバに贖いすくわれしもの歌うたいつつ帰りてシオンにきたり、その首^{こうべ}にとこしえの歡喜^{よろこび}をいただきて快樂^{たのしみ}とよろこびをえん。而してかなしみと嘆息^{なげき}とはにげさるべし。

この言葉はイザヤ書35章に同じ言葉が出てくる。

12 我こそ我なんじらを慰むれ。汝いかなる者なれば死ぬべき人をおそれ、

バビロニアやアッシリヤのことです。

草の如くなるべき人の子をおそるるか。13 いかなれば天をのべ地の基をすえ汝をつくりたまえるエホバを忘れしや。

エホバの神さまの力を、今直ぐ現れないといって、すぐ疑ったり忘れたりしたらダメだと。

何^{いか}なれば汝をほろぼさんとて予備^{そなえ}する虐^{しえた}ぐるものの憤れるをみて常にひねもす懼^{おそ}るるか。虐^{いきており}ぐるものの忿恚^{いきどおり}はいずこにありや。14 身をかがめいる俘^{とらわれびと}囚^{とら}はすみやかに解かれて、死ぬることなく穴にくだることなく、その食^{かて}はつくること無^なるべし。15 我は海をふるわせ波をなりどよめかする汝の神エホバなり。その御名を万軍のエホバという。16 我わが言をなんじの口におき、わが手のかげにて汝をおおえり。

「わが言をなんじの口におき、わが手のかげにておおう」

とある。これはちょうど、預言と僕のことを言っているようなわけだ。力強い言葉もやるし、



手足に動けばエライことをすると。モーセが手を揚げればどうこう、手を下げればどうこうということは出エジプトの時もやったでしょ、あれ式なことです。

かくてわれ天をうえ地の基をすえ、シオンにむかいて汝はわが民なりといわん。

神さまが本当に「わが民」とか「わが僕」とか言う時には、もうその言葉で力がきてしまわうわけです。

「信仰」なんて簡単です。要するに無条件に受けとることだけ。なにも信ずる必要はない。無条件に受けとればいい。体受する。身体で全存在で受けとる。それを信という。心理的に信ずるということではダメです。「信仰」という言葉が一般に非常に躓きに、観念的になっている。だから、

「私は信仰なんかありません」

と言つてやる。無理やりに信じ仰いだつてダメなんだ。

●全存在で一如の境地

イザヤ書52章にはいります。

1 シオンよ醒めよさめよ、汝の力を衣きよ。

「汝の力」とは何ですか。これはエホバのことです。「エホバの力を着ろ」ということです。

聖都エルサレムよなんじの美しき衣をつけよ。

「キリストを着よ」

という言葉がある。「美しき衣」を、天衣無縫の神さまの衣を着なさいということ。

今より割礼をうけざる者および潔からざるものふたたび汝に在ること無なるべければなり。²なんじ身の塵をふりおとせ。エルサレムよ起きよすわれ。俘とられたるシオンのむすめよ汝がうなじの縄をときすてよ。

エルサレムにおける栄光に向かつて進むところの非常に美しい言葉です。

3 そはエホバかく言い給う、なんじらは価なくして売られたり。金なくして贖あむるべし。

価なくして売られたから、今度は価なくして贖あむれる。

4 主エホバ如此いい給う、さきにわが民エジプトにくだりゆきて彼処にとどまれり。アッスリヤ人ゆえなくして彼等をしえたげたり。

もう本当に二束三文の取扱いを受けたわけです。

5 エホバ宣給く、わが民はゆえなくして俘とられたり。されば我ここに何をなさん。

エホバのたまわく、彼等をつかさどる者さけびよばわり、わが名はつねに終日ひねもすけがさるるなり。⁶この故にわが民はわが名をしらん。このゆえにその

日には彼らこの言をかたるものの我なるをしらん。我ここに在り。



全存在が神さまと一如の境地になったときにはじめて生きるといえる。いわゆる神学的に言ったってダメです。私の神学はそんな神学ではない。全存在で、一如の境地になる。私は今、花瓶の菊を見ている。花卉がどうのこうのというのは外から知っているだけのなすだ。菊の中に自分の魂を、心を入れて、菊と一如の境地になったときにグーッと菊の生命と一つになる。それが本当に菊を知ること。それは本当の霊知です。本当の霊知は最も現実的なんです。いわゆる科学的ではない。

●不識

「廓然無聖」という言葉がある。

「梁の武帝、達磨大師に問う、如何なるか。是聖諦第一義。磨云く、廓然無聖。帝曰く、

朕に対する者は誰なるぞ。磨云く、不識。

梁の武帝が達磨大師に、仏道の極意たる第一義は一体何かと聞いた。

達磨云く、廓然無聖。

広大無辺であつて、聖とか聖でないとかいう相対的判断をもうひとつ乗り越えた世界だという。

帝曰く、私に今対して話しているのはどういう人か。磨云く、識らず。」

と。この「不識」というのはどういうことか。ソクラテスが、

「自分は分からないということが分かった」

と言った。この「不識」というのはああいふ分析的な判断とはちがう。だから、ヨーロッパ人には分からない。ソクラテスでも分からない。達磨の方が上です。魂の真理はもう東洋の方に移っている。医学でもそうでしょ。西洋医学はダメで東洋医学です。本来、東洋には素晴らしい一如の世界が流れていますから。それが道なんだ。老子もそうです、大変な人だ。

「不識」とは何ですか。知るとか知らないとか、そういう相対的判断を自分に対して意識している、自己意識している。「不識」とは自己意識しているような世界から抜けているということ。自分がどうだこうだと判断しているうちは、顧みられている世界です。顧みられている世界はまだ本ものではない。あるがままの何とも言えないところの何ものかである、というのがこの不識ということ。意識でも分からない。言葉にも言えない。ということは、逆に言うとも、もの凄い事態だぞということ。「不識」と言われたら、本当は、帝はぶっ倒れるくらいの世界です。私がなぜここで今、このことを言うかというのと、

「自分の側がどうであるかであるなんていう世界ではないぞ」ということです。

6 この故にわが民はわが名をしらん。

大事なのはこのエホバの名というもののの中に一如の世界になってエホバを本当に知った



ときに、自分の側は本当に不識であることが分かる。もうこれは最高の境地です。もう説明できない。

このゆえにその日には彼らこの言をかたるものの我なるをしらん。

という言葉は素晴らしい。

「今言っているのは私だ。この私がどういうものかということが分かったら、お前の中にはエホバの霊がたぎるぞ」

というわけです。それが不識の世界です。自分なんかはや全然問題でない。顧みることすら要らん。何か知らんけれども、そういうことです。これは私は表現できない：（異言）：

●エホバを知る

我ここに在り。

というのは、

「我を視よ」

ということです。このイザヤ52章6節は今日の一番大事な所です。エホバを知る。それは即ち義であり恵みである。もう分析して言う必要はない。どうですか、楽しいですか。身体が浮き上がらないですか。

7 よろこびの音信^{おとずれ}をつたえ平和をつげ、善きおとずれをつたえ救いをつげ、シオンに向かいてなんじの神はすべ治めたもうというものの足は山上にありていかに美しきかな。8 なんじが斥候^{ものみ}の声きこゆ、かれらはエホバのシオンに帰り給うを目と目とあいあわせて視るが故にみな声をあげてもろともになえり。

「神さまの帰り給うを目と目とあいあわせて見る」

とある。実にありありと見るというわけです。なんと預言者の世界の現実の現実は凄いかと思う。霊の神さまをこのようにして現実のように描写している。やはりユダヤ人は凄いなと思う。思われている世界ではない。

9 エルサレム^{あれすた}の荒廃^{あれすた}れたところよ声をはなちて共にうたうべし。エホバその民をなぐさめエルサレムを贖いたまいたればなり。10 エホバそのきよき手をもろもろの国人の目のまえにあらわしたまえり。地のもろもろの極^{はて}までもわれらの神のすくいを見ん。

もうエルサレムばかりではない、地の極までもこの救いを見るぞと、グーッと先まで終末的なことを言っている。もうキリストの福音の預言がキラキラ光っている。これを全部、キリストは一身に受けとってしまったんだ。全イザヤ書をキリストは受けとってしまった。

11 なんじら去れよされよ、彼処をいでて汚れたるものに触^ふるなかれ。その中をいでよ。エホバの器になう者よなんじら潔くあれ。



「自分から抜け出る、出我しろ」

と私の讚美歌にもあるでしょ。己を絶する。そうすると、本当の不識の世界に入る。

¹² なんじら急ぎいづるにあらず、趨^{はし}りゆくにあらず。

そんなに慌てる必要はないと。

エホバはなんじらの前にゆきイスラエルの神はなんじらの軍後^{しんがり}となり給うべ
ければなり。

これは私の大好きな言葉だ。アルファ・オメガ、始めて終りということ。先頭で軍後^{しんがり}となる。神さまは先頭かと思つたらまた軍後にもなる。そして、エルサレムの門の閉じる時に、神さまはしんがりになって入ってくる。ひとりも漏らさず、そのようにしてキリストは皆さんを天国に入れようとしていらつしやるわけだ。どんなことがあつても、失望することはない。ダメになればなるほど逆に凄くなつてください。それは聖霊の世界だから。死んだつていいじゃないですか。それはもう天界に往くことなんです。それだけの絶対的境地になつて、私たちは進んでいきます。

● 祈り

祈ります。無名の偉大な預言者、しかし、あなたのどん底の僕、第二イザヤの書をとおしてあなたの御声を承り、あなたの力に与かり感謝いたします。東西南北からこの兄弟姉妹たちはいろいろな事情を乗り切つてやってきました。あなたのご承知のとおりです。それが故に、何よりもキリストさま、あなたを第一として私たちは集まりました。あなたは先頭に立ち、しんがりとなつてくださる。このイザヤ書の驚くべき音信に私たちは楽しくまた勇ましく、恵まれて感謝いたします。この集会をとおして、この兄弟姉妹たちの中にたぎるところの驚くべきものを全身をもつて携えて帰ったら、近辺の人たちに伝道せざるを得ません、伝えざるを得ません。そうでなければ、災いであります。神さま、どうぞ、私たちをそのようにお使いください。私たちがこの集会を有つのは、正に人を救わんがためです。

この兄弟姉妹たちが聖霊にあつて聖言にあつて一つにせられ、あなたと一如の境地に入られて、私たち自身は「不識」です。あなたを知ることが、全存在で一如の世界に入ることが、いかに恵福な、いかに無限無量な自由自在な境地であるかはいよいよ身につけてくださるように願ひたてまつる。今、心からの感謝と讚美を兄弟姉妹たちの全身に溢れるそれと共に、御名により捧げ奉る。アーメン。

